PROJECT

「情報遺産」を博物館が構築する意義 ──「核としての周縁」からの発信

文・写真
野林厚志

フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクト ● 台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応（2015-2018）

プロジェクトの目的

本研究は国立民族学博物館（以下、民博）全体で推進しているフォーラム型情報ミュージアム構築の中の１つの研究プロジェクトである。本稿では、筆者がこの研究プロジェクトを立案するきっかけとなった問題や、学術資料の情報環境の高度化に関わり、ヒントを得たいくつかのプロジェクトを紹介しながら、本プロジェクトの目指すところを述べてみたい。

本プロジェクトの目的は、プロジェクト課題名にもあるように島嶼環境における物質文化を生態学的適応という観点から探究することであり、特に、筆者が調査、研究を続けてきた台湾と、地理的に島嶼環境として連なる琉球諸島を対象としている。具体的には、それらの地域で利用されてきた生活用具、工芸品を対象とし、製作され利用される生態環境ならびに文化的脈絡に関する基礎的な情報を現地調査、文献調査から収集したうえで、これら両者の相関関係が参照可能なデータベースの構築を行うとともに、それを活用した新たな調査や研究の展開を狙ってみたいと考えている。

とはいえ、プロジェクト立案の最初からこんな目的を掲げていたわけではない。筆者にとっては頭の痛い問題が、民博に収蔵されている資料やその資料の情報を外部に対して公開しているデータベースに関して山積しており、それを解決したいというのが、出発点における本音であった。

民博の台湾資料が抱える問題

民博には台湾で収集された資料が約 6,000 点収蔵されている。これらの資料の大半は民博が収集したものではなく、他者が収集した資料を民博が寄託や寄贈、購入の手続きをとって収蔵してきたものである。この「他者が収集した」というところがそもそもの問題の原因となっている。それは、資料に付されている学術情報には必ずしも統一性がなく、そればかりか情報そのものが欠落しているものがあるということである。どのような状況で収集されたのか、どこで収集されたのか、そんな基本情報さえも備わっていない資料が少なからずある。その場合、収集者から当時の状況を聞き取り調査するなり、当時の関連した資料の提供を受けるといったことを普通に考えつくが、資料の大半は日本統治時代の台湾、すなわち、1895 年から 1945 年の間に収集されたものである。鬼籍に入った収集者も多く、存命であっても半世紀以上も前の記憶をたぐり寄せることはそれほど容易ではない。

民博の収蔵庫での資料調査。デジタル機器の使用は必須（2013 年 7 月、国立民族学博物館）。

次なる悲劇は、そうした不十分な情報環境のもとで民博へ資料の受け入れをしなければいけなかったことである。一部の資料は台湾研究にたずさわっていない研究者が登録時の受け入れ担当となっていて、原収集者の集めた情報が必ずしも十分には検証されていない状態で、資料のデータベースが作られ公開されているのが現状である。

こうした状況ゆえ、筆者は台湾の研究者から叱責され続けている。「民博のデータベースは日本語しかないので、利用者が限定されてしまう。」「民博のデータベースの情報は不十分である。いや、情報そのものがない。」「民博のデータベースの情報は誤っているものがある。」筆者は台湾の研究者や原住民族の当事者で民博の資料の熟覧希望者に謝罪し、言い訳をしてきた。しかしながら、こうした状況をいつまでも続けてもいられない。まずは、データベースの基本情報を確認し整備したうえで、少なくとも英語と中国語版の公開、加えて、資料に関してこれまで行われてきた調査や研究の情報が含まれる論文や書籍、エッセイ等の書誌情報を付帯させることを考えたのであった。

IF、MAP、GBIF、TECOM

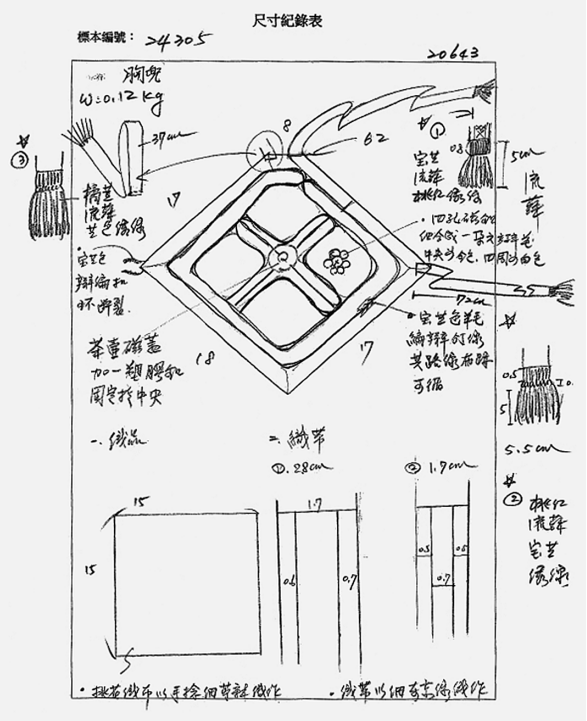
このプロジェクトを立案するに際し、筆者自身も資料の情報環境に関わるいくつかのプロジェクトを進めた経験があり、海外で行われている学術情報の環境整備に関わるプロジェクトについて学ぶ機会も得ていた。

筆者自身が関わったのは、民博の常設展示場の新構築で手がけた IF（Image Finder）と MAP（Minpaku Anthropological Phototheque）で、いずれも常設展示場内に設置された情報端末である。前者はタッチパネルのスクリーンに映し出された展示資料の画像をタッチすると、資料に関わる情報（書籍や論文、エッセイ、博物館が提供するコンテンツ）を知ることができる。後者はタッチスクリーン上に映し出された世界地図上に散らばって配置されている写真を選びながら、撮影された時間や場所、その内容についての情報にたどりつき、そこから関連する他の写真を選んで閲覧することができる装置である。いずれにも共通しているのは、情報を得る入口がテキストではなく画像であるという点である。

GBIF（Global Biodiversity Information Facility, http://www.gbif.org）は地球規模生物多様性情報機構の構築した、世界を網羅した生物の生息分布データベースである。2015 年 9 月の段階で、5 億 7 千万あまりのデータが登録されていて、登録も閲覧もすべて無料で行える。自分が調べたい生物の種名を入力すると、それが登録されている場所が地図とともに表示され、データが誰によっていつ得られたものなのかがわかるとても使い勝手のよいデータベースである。登録も基本情報をデータシートに入力して送信すれば、各国で中心となっている GBIF の支援機関にそれが送られ、統一したフォーマットでデータ提供を行うことが可能となる。

TECOM（Taiwan Ethnological Collections in Overseas Musuems, http://tecom.digital.ntu.edu.tw/index.htm）は、2007年から2012年の間に、国立台湾大学人類学系教授の胡家瑜が中心となって構築した台湾原住民族に関する民族資料のデータベースである。このデータベースの最大の特徴は、海外の博物館や学術機関が所蔵する資料を調査し、それらの所在情報を集約して発信している点である。対象となったのは、大英博物館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の大学博物館、カナダのオンタリオ博物館、米国のアメリカ自然史博物館、ミシガン大学人類学博物館である。他館の収蔵品のデータベースを作る作業は並大抵のことではない。資料調査以上に大変なのは所蔵機関から資料公開の承諾を得ることであろう。どの博物館だって、自館の資料のデータは自館のデータベースを通して公開したいものである。台湾大学のこのプロジェクトは、そうしたある種の博物館の面子を超越した、グローバル環境におけるデータベース構築の足がかりを作ったものとして評価できる。

日本統治時代に収集されたタイヤル族の胸当て（国立民族学博物館所蔵）。



胸当てを調査して作成した調査シート。詳細なデータがとられている（2013年、野桐工房の調査で作成）。

情報遺産としての学術資料の記録

筆者は台湾の博物館の研究者たちと一緒に「百年來的凝視」（2009年、順益台湾原住民博物館）、国際連携展示「看見平埔：台湾平埔族の歴史と文化」（2013年、民博企画展）といった台湾のエスニシティを主題とした展示会を実施する機会に恵まれてきた。その経験を通して感じてきたことの1つに、台湾はいわゆる「オリジナル」とよべる文化財、文化資源を国内には必ずしも持っていないということがある。もちろん、植民地主義という脈絡において、海外の博物館や図書館、さらには民博にも台湾に関する貴重な資料が収蔵されていることは事実であり、当然のことながら、資料の返還という課題にも向き合っていく必要があるだろう。しかしながら、台湾の博物館は忍耐強く「オリジナル」の複製を作成し、原住民族の工芸家たちは博物館の資料を調査しながら、自分たちの新たな作品を制作している。こうした場面に出くわす機会が多くなると、筆者は、そうした営みを積み上げていくことを台湾の人たちが大切に考えていると感じるようになってきた。もちろん、「オリジナル」への欲望は誰にでもあるだろう。しかし、それ以上に台湾の人たちは「オリジナル」から得られる情報に貪欲であると筆者は考えている。そしてそれは後世に伝えるべき情報遺産として位置づけられるべきものなのであろう。

これまで、「情報遺産」という用語が使われた具体的なプロジェクトは世界的に見ても実施されていない。個人の情報を記録する研究は ゴードン・ベルが行ってきたMyLifeBitsが有名である。デジタル技術の進展により、多様な種類の膨大な情報を記録することが可能となった現在、記録することそのものはそれほど難しいことではない。しかしながら、記録した情報を「情報遺産」として継承するためには、情報の共有が不可欠となる。すなわち、ベルの想定した個人の記憶の記録という考え方では「情報遺産」という継承の方法は実現しえない。「情報遺産」には、時空間を超えた垂直方向と水平方向の両軸での情報の共有が保証される必要があるだろう。本プロジェクトを単なるデータベースの構築とするのではなく、フォーラム型情報ミュージアムという、時空間を超えた情報共有の枠組の中で進める理由はここにある。

台湾は歴代の中国王朝から見れば周縁であり、日本統治時代の半世紀を経た後、建前上は中華民国の一部として政治的に位置づけられてきた。琉球諸島に対しても、日本、中国の周縁という認識が存在してきたことは事実である。一方で、情報のグローバル環境は地理的な制約を消失させた。地理的な周縁も情報空間の中では核にも周縁にもなりうるのである。情報空間における「核としての周縁」を本プロジェクトであらためて考えてみたいと構想している。

のばやし あつし

国立民族学博物館文化資源研究センター教授。人類学、民族考古学を専攻。人と自然との関係の調査、物質文化とエスニシティとの関係についての研究にたずさわっている。主な調査地は台湾。著書に『タイワンイノシシを追う』（臨川書店 2014年）『イノシシ狩猟の民族考古学』（御茶の水書房 2008年）。主編著に『台湾原住民研究の射程』（順益台湾原住民博物館 2014年）等。